

音楽と音の本収録

音楽と音の本【2014No.3】(HP 収録)

分類：単行本

著者・编者：中村明一

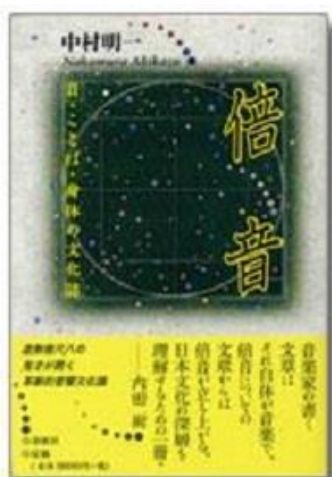
書名：倍音

副題：音・ことば・身体の文化誌

発行所：春秋社

発行年度：2010年10月

備考：



概要：

このユニークな書籍の著者は尺八奏者であり、音について文化史的な見地から説いたものでネットを検索すればかなり多くの書評に出くわします。

本書では、音の「音色」を作り、深層心理や脳・身体の生理に影響を与え、感情や思いを伝えるものが、倍音であるとの見地から解き明かしていきます。倍音というのは、基音に対する言葉で通常、整数次の周波数を持つ音を指しますが、本書では整数次倍音に対して非整数次倍音という概念を出して、倍音の秘密に迫ろうとしています。この非整数次倍音という言葉は初耳ですが、著者は整数倍以外の不規則な振動により生起する倍音を非整数次倍音と呼んでいます。

著者は非整数次倍音の具体例として人の声を挙げ、ザラザラあるいはガラガラした声、所謂濁声（だみごえ）を指すものとし、森進一、桑田佳祐、宇多田ヒカルなどの声をその範疇に入れていますが、一方、美空ひばりや都はるみは整数次倍音と非整数次倍音の双方の成分が多いと分析しています。

こういったタレントが人々の共感を得ているのは、非整数次倍音が親密感、情緒、重要さを訴えかけてくるものと分析しています。主張されていることはよく分かるのですが、一方ウイーン少年合唱団やリリックソプラノやスペアナで見ると綺麗な整数次倍音で構成されているヴァイオリンはどうなのか、それに対する答えはありません。そもそも非整数次倍音という概念は物理学の教科書には出てきませんし、濁声は楽音に対する不規則な騒音が混じった声という考え方もあります。しかしながら、あまりに整ったものに対しては却ってよそよそしさを感じ、多少崩れた、汚れたものが親しみを感じさせることも事実であって、理屈ではない感情的なものかも知れません。

また、著者が尺八奏者であることから尺八の構造や音の成分について解説され、音楽のコミュニケーション論まで展開しています。

最初にユニークという言葉を使ったわけはこういった考え方もあるという意味であって、著者の主張をどう受け止められるかは、読者の感性にもよると思います。つまり、非整数次倍音の物理学的な解釈の正しさは別として、文化的な観点から多様な考え方もあるという意味では面白い主張であると思います。